

## 後記

『駒澤國文』第59号は、令和四年三月をもつて退任される勝原晴希先生の退任記念号として編まれた。

勝原先生は、近代文学の片岡懋先生の後任として、成蹊大学より本学に赴任された。いまさらいうまでもなく、詩歌の研究者として知られている。だんだん大学が企業並みに実務をこなさなければならなくなってきた、議題が溢れ、何かから手をつけようか困惑し始めた時期に、涼しい顔とは失礼かもしれないが、何事もなかったかのように整理し、問題の主なポイントを的確に説明した全学教授会委員のお仕事は、とにかく手際がよく、よくぞこんな難しいことをきれいにまとめるものだと敬服した。学科主任時代には、毎回、手際よく議事進行し、問題をわかりやすく整理しながら議論を進めた。教員人事委員会委員の時代には、教員の人事に関する煩雑な業務が多くなってきたため、事務方と協議、交渉し、書類の様式や審査の方法等を工夫された。事務部署の方々も絶大な信頼を寄せていたようだ。あまり仕事ができすぎて手腕を発揮しすぎると、嫌がられるというところもあるかもしれないが、勝原先生の場合、そういう心配はまったくなく、持ち前のユーモアと明晰さで、難題を上手に解決されていた。さながらマジシャンのようであった。会議中、行き詰まったり解決の糸口が見つからなくなった時、なるほどという意見を述べられ、その後、すんなりと結論に進めるようになったという経験は何度もあった。令和元年十二月七日開催の国文学大会の御講演「萩原朔太郎と自然」では、朔太郎

や室生犀星、三好達治らの詩を取り上げ、朔太郎の独特な自然観についてお話しになった。近現代の文学史を学ぶ「国文学史Ⅱ」という授業は、「ⅡA」が小説、「ⅡB」が詩歌と分かれている。ご自身も創作に関わり、言葉が生まれる「場」を繊細な感覚でとらえることができる勝原先生から、詩歌を学ぶことができた本学の学生は、とても充実した学びの時間を過ごしたに違いない。そのようなわけで、勝原先生をお送りすることは、まことに残念で寂しいことであるが、先生から学んだことを少しでも活かせればと思うばかりである。

本号は、六人の専任教員の論文、資料紹介を掲載した。パンデミックの終息には程遠く、調査もままならない中、多彩なラインナップとなった。

第64回国文学大会は、史上初のオンライン開催となった。『随園詩話』と『日本漢文学』と題して山口智弘先生にお話していただいた。令和二年に着任された山口先生のご専門は、日本漢文学、中国古典注釈史であり、伊藤仁斎、荻生徂徠、安井息軒等についてのご論文が多数ある。漢詩文をめぐる問題を、文献に即して整理し、袁牧の詩論についてわかりやすく解説された。先生のソフトな語り掛けに聞き入り、惹き込まれていった。

(O)

編集委員 岡田 豊

三樹 陽介

山口 智弘